九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Factors at the initial visit associated with poor visual outcomes in patients with acute retinal necrosis

福井, 千博

https://hdl.handle.net/2324/7443286

出版情報：Kyushu University, 2025, 博士（医学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：This version of the article has been accepted for publication, after peer review (when applicable) and is subject to Springer Nature's AM terms of use, but is not the Version of Record and does not reflect post-acceptance improvements, or any corrections. The Version of Record is available online at: https://doi.org/10.1038/s41433-024-03207-w

KYUSHU UNIVERSITY

氏　名：　福井　千博

論文名：　Factors at the initial visit associated with poor visual outcomes in patients with acute retinal necrosis

（急性網膜壊死患者おける視力予後不良と関連する初診時所見の検討）

区　分：　甲

論　文　内　容　の　要　旨

【背景】急性網膜壊死(Acute Retinal Necrosis; ARN)は網膜に壊死性病巣が生じ、急激に進行することにより永続的な視機能障害をきたす極めて視力予後不良な疾患である。その原因はヘルペスウイルスの網膜感染である事が知られているが、標準治療は確立されておらず、希少疾患である事から単施設での視力予後を含めた経過の報告はほぼない。そこで、本研究では九州大学病院眼科で入院加療したARN症例の初診時所見から視力予後不良関連因子を検討した。
【方法】対象は2015年4月から2021年3月に九州大学病院を受診し、前房水PCR検査でのヘルペスウイルスの検出および眼底所見からARNと診断した全34症例34眼である。全症例に対して抗ウイルス薬、ステロイド、抗血小板薬の全身投与を行い、28症例は硝子体手術を施行した。視力予後不良の定義は、社会的失明の基準となる矯正視力0.1以下とし、ロジスティック回帰分析により視力予後不良因子を検討した。既報で視力予後不良因子として報告がある「初診時の視力不良」、「網膜中心部(Zone1)への壊死病変の浸潤」、「網膜剥離の発症」に加え、本研究で視力予後不良症例において優位に広範囲である事が示された(p=0.005)「網膜壊死病変の周径」を合わせた4因子を用いて、ロジスティック回帰分析を行った。
【結果】多変量ロジスティック回帰分析の結果、網膜壊死病変の周径の拡大のみが視力予後不良と関連していた（調整オッズ比[95%信頼区間]：1.28[1.00-1.65]、p=0.03）。そこで、網膜壊死病変の周径とARN発症後の視力推移を検討した。初診時時点では、網膜壊死病変の周径が180°未満の症例と180°以上の症例では矯正視力に有意な差を認めなかった(logMAR 0.52±0.68 vs 0.69±0.63、p=0.17)。しかし、網膜壊死病変が180°未満の症例では、ARN発症後半年後、1年後時点でも初診時視力を維持することができたのに対し、網膜壊死病変が180°以上の症例ではARN発症後半年時点で初診時視力に対して優位な視力低下（p=0.012)を認め、その後視力の回復は認めなかった。ARN発症後1年時点では、網膜壊死性病変が180°未満の症例と比較し、180°以上の症例では優位に矯正視力が不良であった（logMAR 0.60±0.48 vs 1.00±0.59、p=0.001)。
【結論】急性網膜壊死において、初診時時点で広範囲な網膜壊死病変を認めた症例では、最終視力予後が不良である事を見出した。